

学びを選ぶ学びをつくる

レポート

シユタイナー学校の1年

英語、中国語を1年生から

早期教育なのか？

第4回

静まり返った教室に、ドアをノックする音が響く。子どもたちは大きな声で「請進(お入りください)」。教材でいっぱい大きな布袋二つを肩に掛けた花岡風子先生(41)が、輪になって椅子に座る子どもたちの中心に来了。今度は「請坐(お座りください)」。

先生「同学们好(みなさん、こんにちは)」
子どもたち「老師好(先生、こんにちは)」
横浜シユタイナー学園2年生の中国語の授業が始まった。

言葉が動きと結びつく

中国語であいさつを交わした後は中国語の歌、中国語で唱える詩……。花岡先生の中国語は型通りのあいさつだけでは終わらない。極力、日本語に頼らず中国語だけを使う教授法、ダイレクトメソッド。中国語を全く解さず、あつげに取られるだけの記者を尻目に、授業はテンポ良く進む。

授業の構成は、前回(5月29日号)紹介したエポック授業と同様で、静から動、動から静の4部構成。その凝縮版という形態だ。この日の授業は、詩の後に再び歌を歌い、天気、昨日、明日などの

時制、体の部位の言い方などの復習が続き、また歌「幸せなら手をたたこう」、早口言葉、前後左右内外などの「方位詞」、野菜の名称、色当てゲーム、お話、歌と、盛りだくさんだ。いずれの学習も、子どもたちが声を出し、体を動かしながら展開する。

例えば、方位詞。花岡先生が「前、前、後、右、左、右」と中国語で指示するのに合わせ、子どもたちも中国語を唱えながら、その方向にジャンプする。「内、外」の学習では、先生が持ってきた大きな布袋から1本の縄が登場。縄を輪にしてその内と外をジャンプしながら行き来する。動作を言葉に結び付けさせる狙いで、方位詞は特に体浸透させたいと言う。

「きょうの天気は」という中国語の問い掛けに、答えが出てこないとき。花岡先生はもう一つの布袋からスケッチブックを取り出す。全て自作の絵で晴れ、曇り、雨などの天気が描かれている。絵を見て、答えられなかった単語を復習する。「子猫、魚を釣る」のお話も花岡先生自作の絵を見せながら、ジェスチャーたっぷりに表情豊かな中国語で語られた。日本語で意味を説明することはし

ない。絵、声の調子、身ぶり、手ぶり、表情……表現手段を総動員して中国語を感じさせる。

スピーディーで活動的な授業展開の中で、子どもたちは中国語だけの45分間を過ごす。この間、花岡先生が発した日本語は10に満たなかった。先生が何を言っているか分からず、子どもたちがまごつくことはない。先生に声を合わせて話し、歌い、体を動かす。彼らが中国語を学んだ期間は1年と少し。戸惑い、あつげに取られたまま授業を終えたのは、見学した記者だけだった。

しかし、子どもたちはどこまで花岡先生の中国語を理解しているのか。

「例えば、椅子を元に戻してという指示文。子どもたちがその文だけ聞いて、即座に日本語に言い直せるかは分かりませんが、言葉が動作に結び付き、動作として浸透している途中です」と話す花岡先生。

「大人が中国語を学ぶ時、一語一語日本語に訳し、また発音では四声を上げる音、下がる音と頭で考えながら覚えるが、子どもたちは耳で聞くだけでなく、まるで全身の細胞に言葉を取り込んでいくようだ。中国語は日本語と発音が違い、はつきりと大きな声で話す。日本人の大人は人前で大きい声を出すことを恥ずかしがる。でも、子どもたちは恥ずかしがらない。美しい抑揚をとっても気持ちが良いと感じることが表情で分かる。それに、大人と違って中国語は難しいという先入観がない。子どもの能力を過小評価してはいけない。いくらでも覚えていきます」と目を細める。

外国語学習については、「国際化の時代、早期の導入が必要」という主張と、「まずは日本語をしっかりと学ぶのが先。中学からで十分」という反論がぶつかり合う。論争が続く中で、2011年度から小学5、6年生に対して、文部科学省が必修化に踏み切ったのが「外国語活動」だ。

これに対して、シュタイナー教育では小学1年生から二つの外国語を学ぶのが大きな特徴の一つだ。学園では9年生まで、第1外国語の「英語科」とともに、「中国語科」を第2外国語として週2こまずつ学ぶ。外国語の早期導入に迷いはない。

前回まで見てきたように、シュタイナー学校の低学年の授業は、公立学校に比べかなりスローペースで進む。しかし、外国語については公立よりも格段に早い段階で導入する。しかも2カ国語。シュタイナー教育は、発達段階に合ったカリキュラムを標榜しているが、これは一種の早期教育ではないのか。

花岡先生が中国語と出合ったのは13歳。中国語の詩の響きの美しさに魅了された。その後、日本で中国語を学び続けた。北京の大学に留学しながら日本の独資企業のオフィスで通訳として働いたことがある。周りは中国人ばかり。彼らにとつて花岡先生は日本人の代表だが、日本のことを聞かれても、答えられないことが多いのがくげんとした。自分が日本人であることを再確認するとともに、母国をあまりに知らない自分にも気付いた。中国は世界第2位の経済・軍事大国。「子ども

たちが社会に出て目の前の中国語に取り組み必要に迫られたとき、すぐに辞書を引けて、ちよつと勉強をすればいくらいの基礎力は身につけさせてあげたい。語彙はいざとなれば覚える」と言う花岡先生。

でも、それ以上に教えたいのは、相手の立場を理解できると同時に、日本人である自分との違いをはっきり認識できるということ。その先には、文化の枠を超えて、自分自身、そして相手がある存在であることへの気付きが待っている。語学はそこに通じる道筋です。日本は中国文化の強い影響を受けながらも、中国にはない何かを創り続けてきたことが言葉の違いから感じられる。その意味で、中国語は日本語を映す鏡として最高。小さい頃から言葉や歴史を学ぶことは、頭ではなく、心情的に中国を理解することにつながる。

コミュニケーションの素地

「外国語を学ぶ目的は、違う世界観、違うものの見方を養うこと。母語だけの文化に浸ると、母語の文化を中心に物事を見るようになる。そのパラメータをとることです」と話すのは、学園で3、6年生に第1外国語である英語を教える内村真澄先生(45)だ。大学でニュージージーランドに留学した際、外国人との価値観の違いを受け入れるのに痛みを感じた。人との一定の距離を洗練した大人の付き合い方と思っていたのに、外国人の友人は土足で踏み込んできたように思え、葛藤があった。しかし、相手のバックグラウンドを知った後、

「それもありがた」と共感できるようになった。「今はハグも大丈夫です」と笑う。

内村先生は、夫の仕事の関係で、米ニューヨーク市郊外に住んでいたとき、シュタイナー学校の教員養成講座に通った。こんな授業があった。5人が椅子を丸く並べて座る。中心にあるテーブルにはティーポットが置かれた。5人がスケッチブックにその絵を描いた。互いの絵を見比べると、自分の死角になっていた絵柄や取っ手が描かれていた。同じものを見ていても、見えるものは立場により違う。当然のことを実感した。

自身が感じた痛み、葛藤を踏まえ、内村先生は「小学1〜3年生は模倣の力がまだ強い。偏見もない。言葉は言葉そのものより、それ以外の顔の表情や身ぶり手ぶり、声の調子、リズムなどノンバーバル(非言語)なものの方が9割ともいわれる。その9割を大切に、その雰囲気浸ること。心のストレッチ体操をすることで、異文化体験を受け入れやすくなる」と考えている。

では、横浜シュタイナー学園の授業は、どんなものなのか。内村先生が担当する4年生の授業を見せてもらった。

詩、歌から始まるのは低学年のエポックや前述の中国語と同じだ。が、子どもたちは初めから机を前に席に着いている。シュタイナー思想で、節目とされる9歳のこの時期、子どもたちはだんだん世界を客観視できるようになり、文法などの規則の学習も可能になるとされる。また、低学年ではほとんどが英語だった授業に、日本語がかなり

の頻度で混じるようになった。4年生ともなると、授業内容も複雑になる。4月には転入生も加わった。英語の指示を分らないまま聞き流してしまふことを避けるための配慮だ。

この日の授業のメインは、4年生から学び始めたアルファベット小文字の定着。イーゼルに載せた小型の黒板に、内村先生がランダムに小文字を書き、先生に当てられた子が、皆で歌う「ABCの歌」に合わせて、指示棒で小文字を指していくゲームだ。

目を引いたのは、授業終盤のお話のコーナーだ。内村先生が身ぶり手ぶりを交じえて、ゆつくりと語り始めた。「A man and his wife are working on their farm. An old woman calls to them.」

子どもたちの集中力が増す。

“Old Woman : Excuse me, but could you give me some water? I'm very thirsty.”

Man : Here's some water. Please drink this.”

内村先生がここまで話したところで、日本語の意味を尋ねると、多くの子どもたちが手を挙げた。“could you?”が“can you?”より丁寧な表現であることについては、教えていない。この中に、それ以外の新出語もない。この教材は中学2年生の教科書にも載っている“A Magic Box”だ。

手を挙げた子どもたちが日本語で答えた情報をつなぎ合わせていくと、インフォメーションギャップが次々と埋まり、一つのストーリーが浮かび上がった。何人もが意見を出し合い、協調しながら一つの考えにまとめる授業。「外国語活動」に

ついて、国の学習指導要領が目標とする「積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度の育成を図り、コミュニケーション能力の素地を養う」授業を実現している。

しかし、日本型の一斉授業の中ではこうした態度、能力の育成は難しいという指摘もある。小学校への英語教育導入に反対していた英語教育の第一人者、鳥飼玖美子立教大学教授は「内外教育」のインタビュアー(11年3月4日号)に応じ、「英語の授業では『話さない』と言うが、同じことを他の授業でやったら子どもはこっぴどく叱られる」「日本語で受けている授業と英語の授業とで、人が変わったようになれということだ」と痛烈に



4年生の英語、先生のお話はジェスチャーたっぷり

批判したことがある。

これについて、学園で高学年の英語を担当する浜本マヤ先生(49)は、「公立学校のメインストリームも一斉授業から双方向型に変わってきている。学園は少人数学級なので指導要領の言うコミュニケーションの素地を培いやすい土壌はありますが、一斉授業の形式なので教員の工夫が必要。私自身もなかなかできていないのが現状です」と話す。

外国語で学ぶ

学園の英語の授業は、7年生(中学1年生)以上が週4こまで公立と同じだが、1〜4年生までが週2こま、5、6年生が週3こまとなっている。低学年は、聞くこと、話すことを主体とした授業で、言語の持つ音やリズムに親しみながら歌や詩、ゲームを通して学ぶ。内村先生はこれを「まねっこ遊びみたいなもの。発音やノンバーバルな部分を、この感性豊かな時期に学ばないのはもつたいない」と話す。3、4年生からは文字の読み書きが加わるが、それも座学ではなく、体を動かすことやイメージを大切に。アルファベットにしても、平仮名と同じく絵から導入する。

英語、中国語ともエポック授業と密接な連携を図るのも特徴の一つだ。one two three……という数字の数え方もエポックで数字の意味を学んだ後に学習する。時計の見方は、2年生のエポックで習うが、英語で時計の見方を習うのは、エポックで分数の2分の1(half) 4分の1(quarter)を学んだ後の4、5年生以降になる。

「単なるコミュニケーションツールとしての外国語を学ぶのではなく、外国語で何を学ぶかということです。上級生になると、例えば産業革命など歴史のエポックで学んだことについて、関連する英語の文献を読んだり、スピーチを行ったりする。エポックで深く学んだことを外国語で学び直すことで、より深く根を下ろせる。外国語を学ぶ対象にするというより、外国語で学ぶことで自然と身につくことを狙っている」

浜本先生はこう指摘した上で、さらに続ける。

「本当に、stand up も分からないところから英語だけで始める。全く分からないことをただまねしているだけでは子どもたちは飽きる。自分たちが何をしているか、何を聞いているかイメージできるような授業でなければならぬ。もちろんはつきり意味が分かる訳ではありません。だんだんはつきり分かるころまで持つていくのが9年間の流れ。分からないことを拒否してしまうと分からないままになってしまうが、外国語だけの授業により、分からないものを受け入れる力はいく。分からないからと拒否するのではなく、何だろうと興味を持つ力になることを願っている。もちろん英語の力もつけさせたいですけどね」

こうした授業を6年間受け続けた子どもたちにはどんな力がついているのか。2年生の中国語と4年生の英語の授業を見学させてもらった翌日。7年生が英語劇を3〜5年生に披露した。

題材は“Frog and Toad Are Friends”劇は、英語の歌“Spring Is Coming”で始まった。浜本

先生が替え歌をつくり、ギターも演奏。子どもたちがそれに合わせて歌う。クラスの子が指笛やおもちゃの楽器で小鳥の鳴き声の効果音を奏でる。春なのにToadは寝てばかり。友達 Frog が遊ぼうと誘いに来る設定だ。入れ代わり立ち代わり登場するナレーションの子どもたちはもちろん、出づっぱりの2人の主役も台詞を覚え込んでいる。テキストは机の引き出しに入れたままで。

浜本先生によると、“Frog…”は生活に入り込んだ身近な語彙が多く、ネイティブスピーカーの子であれば、小学校1年生レベルだが、現在完了や不定詞など文法的要素も含めると日本では中学2年生レベルという。学園の7年生もこうした文法的な理解についてはまだだ。が、「ストーリーを読んで、理解し、音読できるころまではきている」と浜本先生。子どもが自国の言語を身につけるように、7年生たちも授業を通して英語を自然に身につけつつある。観客席からは時折、くすくすという笑い声が聞こえる。下級生たちも、初めて見る英語劇の内容をかなり理解しているようだ。

コルカタのプール

『英語が使える日本人』の育成のための行動計画。08年度を最終年度として、中学卒業で英検3級以上、高校卒業で準2級〜2級以上を目指した5カ年計画だ。実際、それだけの力を身につけた生徒は中高とも3割と大幅な計画倒れに終わった。文科省は11年、同じ目標を掲げた改訂版の計画を再度掲げた。背景にあるのは、グローバル

化に立ち遅れたことに対する経済界の焦りだ。焦りは、政府の「グローバル人材育成戦略」にも通底する。

低学年から外国語に力を入れるシユタイナー学園。地続きの欧州で生まれたシユタイナー学校が目指すのもグローバル人材の育成なのだろうか。

「グローバル人材の定義にもよりますが、日本経済に貢献する、実利に重きを置いた人材の育成という意味ならそれは違います」。取材にに応じてくれた3人ともが、言下に否定した。そして口をそろえたのは「自分と違うものを受け入れる寛容さ」だった。浜本先生は父親の仕事の関係で小学校5年生からインドのコルカタにある日本人学校に通った。日本企業の現地駐在員の娘として家庭教師も付いていた。しかし、一歩街に出ると、貧しい人が大勢いるのは当たり前だった。学校にも英語の授業はあったが、英語は主にさまざまな国籍の子どもたちが集まるプールで覚えた。

「自分をしつかり持つこと。それがないと、英語ができてても自分が何者かさえ分からない。根っこがあった上で、翼である外国語の力を生かせる。国籍、民族、文化を超えたところで、人とつながれる。学園で根っこを培い、そこから先を自分で開拓していける力をつける。言葉を使って他の人とつながることが意味をもたらす。子どもたちにもぜひ、そういう体験をしてほしい」と浜本先生。相手に打ち勝つのではなく、寛容さを備えたグローバル人材の育成を目指す。

(田橋秀之 内外教育編集部)